

目的. 和服の上半身の着装は、平面形体のものを体幹に密着させて着装させるために、動作すると、これに伴って着物に、静止時からのずれが生じる。殊に、上肢・肩の動きによって生じるずれは、ウエスト位で紐・帯などによって固定的に押えられているため、脇に生じるずれは、衿もとまで影響を及ぼすこととなる。そこで、着装を人体機能の面から体型別にとらえて、ずれ量を定量化し、和服の着装の検討を行なった。

方法 被験者として、肥満体型・普通体型・瘦身体型の3体型の者を選び、皮膚表面に計測点（鎖骨上縁、肩峰点およびウエスト位の前中央、脇中央、背中央）をつけて、静止時および動作時の人体・着物のずれを計測した。尚動作は、上肢下垂を0度として、90度前、側挙、180度挙上を0度から各々20回の繰返しで行なった。

目的 解析の結果、動作量と着物のずれ量の間には、明確な相関がみられ、また、動作量と着装体の皮膚の伸びとの間にも同様の相関が認められた。即ち、動作に伴う皮膚の伸びが、着物のずれ量を決定していると考えられた。体型別には、肥満体型に大きく、瘦身体型には小さい。但し、瘦身体型は、運動量が大きくなった場合に、相対的なずれ量が増加している。また、着装の部位によっても、ずれ量は明らかに異なっていることが認められた。